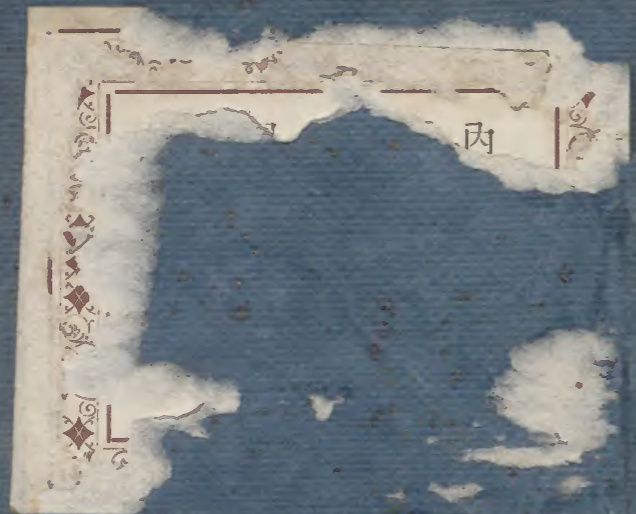


翦花翁傳

春

三二正
月月月



庫文官政太				和
		一〇九七八	書	門
		二〇九		
四冊	二架	函		

内閣文庫	
番號	和 10978
冊數	4 (1)
函號	199 379

199-379



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak 2007 TM: Kodak



嘉永新彫

南紀水竹亭編撰

剪花翁傳

水竹南亭

四季雜
全四冊



剪花翁傳序

父母之於子、生育之道、莫不主、大地之於萬物、亦然、故曰、大地之物、凡欲育者、物者、非窮理於性、以順天地生育之道、不能也、友人水竹翁性、清印培育、清印中之、清印術之精、大異於世之貪財傳秘、清印也、清印六、清印學、清印之、清印運、清印配、清印之、清印於、清印四、清印時、清印之、清印候、清印窮、清印理、清印盡、清印性、清印之、清印無、清印餘、清印矣、清印嗚、清印乎、清印余、清印者、清印醫、清印也、清印以、清印公、清印羽、清印之、清印術、清印勻、清印及、清印起、清印死、清印之、清印術、清印豈、清印忘、清印可、清印不、清印究、清印其、清印原、清印因、清印乎、清印則、清印窮、清印理、清印於、清印性、清印以、清印順、清印天、清印地、清印生、清印育、清印之、清印道、清印者、清印公、清印存、清印與、清印余、清印固、清印所、清印當、清印講、清印求、清印也、清印翁、清印自

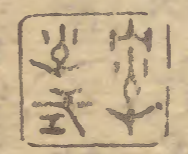
新刊水竹亭傳

序

著剪花翁傳上梓以示同好之士余深嘉翁之志、冕一言於卷首云

弘化丁未歲猛冬

國齋古矢知白撰



剪花翁傳前篇卷之一

凡例



○浪花のりりみ信言に剪出といふ者頗る六七十個あり嘗て近郷近國二日路三日路又甚き者四五日と歷く草木の花葉と剪得く賣花市小鬻き家業ゆせり此後の中に代々傳へて業とせし老練のもの手馴覺え剪花保育の温室冷害升水薬水等の專要なる精義と今更小著して挿花者流の目近く易きふみおせり

○温暖の頃開花乃速あるは冷害を保つて等々素の業

精粗の質りり 肥も厚濃淡薄の差りり 其能相應ざる所と
分知せんそん書中に盡くか

○土の性質各國同等うら故に詳ふ攀ざれども 回莖或云舞也

土のどろろ草木養育の教書よつまご攀む 夫回莖土といへん

浪花街巷の苴埃 惡水よ引まぐ 大溝道ふ入く未も掘よ

○落川よ流き水底の土砂と雜るり居り居り竟る腐泥

ともく月 浚川の度よ搔上ふ 此泥土沙芥恰も河中く

自ろく水飛せり 蓋色青黒く 中に雲母のごらん

光澤と含まがり 本質堅まらば 碎け散る 粘くま 乾守

湿るば 千樹万州 此土小植の時も成長繁茂せり

○上條の音方よ 方幾分陰陽 地幾分乾湿と定め出せり

八十八夜頃り氣候と元とんれんを四季各陰陽乾湿同

からざるの如くは 是と思量とべ

○畿内と隔離せり 邊地り氣候もきと宜其風土も應トて

是と斟酌とべ

○樹州開花の季候り如く 歌書祕書の格例よ効ひ各其本

節小出まき更ぬる浪花りり 近母れ氣候もやりの

一旬或ハ二旬遅速りりて 本節氣候の次第よ及り 頗る小同

養花翁傳前篇

大異なりなり 是其年乃寒暖よりなり 叔四季咲くは
 春秋二季咲くは一句二句の遅速ありて 竟ふ四季に速なるもの
 所謂冬牡丹 燕子花 月季花あが 種々ありあり
 又梅類乃至くは七月梅 八朔梅 まる椿類の至て早
 白露 初嵐 秋乃山ふど 八九月より月々お續き翌年三
 月下旬に至る 梅椿り花 あほりるごとく 故ふ其部類
 分別され 本節お拍もごと 種々艸木各花其現莖り節
 月と考へ 元日立春の例に似りく 正月より十二月迄は
 次第して見易かしくしむ

○ 毎條に既よ開花の時節と擧ぐらるる剪花者も
 蕾落と剪得るは要と故ふ其節頗る早く未開り
 時節と擧ぐらるる

○ 梅椿 桃櫻 牡丹 芍薬 瞿麥 百合 菊等 各種類 数多
 して悉く牧羊をべりて僅ふ其数種と出でり

○ 栽樹家より大輪花と賞を 剪花者も 格外の大輪花は
 好まざらんが 挿花に用たるは 擧ぐらるる

○ 挿花者流 各其家よりして 禁忌の花なり 又或は當世
 と憚るるは 家よりされは是と斟酌せむ

新編花翁傳前篇 凡例

○樹艸の名凡呼ぶ剪花者と栽樹家と同きらり同トから
 ぶるあり或ハ品數ハひくくして剪花者ハ呼ぶ名ハ少ク栽樹
 家ハ呼ぶ名ハ多ク蓋專ラ剪花ト要スル故ハ其等（其等）キ
 論（論）キ一其等（其等）ハ剪花者ハ通言トモテ云々セリ
 尤モ鄙言モ亦少カシクバ

○樹艸ノ名ノ如ク國言トモテ呼ラリ或ハ其字音ト直ハ呼ワリ
 或ハ漢字ハ義訓トモテ呼ラリ或ハ雅名アリ或ハ俗稱方言
 々々あり皆是通信ト隨ク書セリ

○字音（字音）アルハ言葉等ノ假字遣（假字遣）ノモキト今是ト考訂セバ

故ハ誤謬モまこと多クハ一

○樹艸生育存花升水の方（樹艸生育存花升水の方）專（專）ビ剪花翁（剪花翁）ガ傳（傳）ト要（要）トス
 蓋近世諸家ニ秘（秘）トス所（所）ハ升水の方屢多ク就中或家ハ
 秘（秘）スル升水の方ト撰（撰）ト是ト章末ハ加（加）フニ一方或ハ又方リ
 二字ト以テ其方（其方）ノ難易（難易）ノ如キト各其深所（各其深所）ハハクモ
 自（自）ラ（自）分知（分知）ト云キ（ト云キ）ハハ

弘化四丁未春三月 木國中山雄平撰



花形分解之圖



花形分解之辨

夫冬より春の花の葩をさるるの久して蕾
 となり百許して葩となり三五日許して
 開花となり夏より秋の花今朝の葩午の刻
 まよふ蕾となり夕方より葩成翌早朝
 開花となり叔の葩鹿皮を色うつり
 蕾の葩の白既より中は萌し満て綻
 たりものつり乃上層小模となり
 右各樹州より葉の形ら異同あり

○再云。蒼蕾落とびばもはげしきより。初は○蒼葉の形。中と○蕾の形。

○後と○落葉の形。

○蒼を合之。是牙音を堅く。奥小在て。まど發せん

○蕾ハ雷ハ。是活音を。内ハ鳴響也。既ハ萌ハ。發也

○蒼ハ倍之。是唇音也。外ハ發也。葩ハ頭ハ。形。蕾ハ倍也

並云

○一曰。葩ハ。花枚の美ら。まど幾枚とま。又花開くの美。又花は。平は。美あり

○二曰。苞ハ。鹿皮之。蒼と色ハ。の美。蓋花の萌。ハ。芽也。花袋と。ハ。此芽の枝群

大して。萌る。蒼の形。渾。蔓。時。鹿皮と。被り也。故。苞と。は。が。こ。も。よ。べ。り

○三ノ日萼ハ花總トシテ花形ノ總テノ括ルベシ○又花萼トシテ葩ノ葉ニ
 きて齒ノ髭ヲ入ルル○又蒂トシテ莖トシテ隔ツノ莖ノ鏝ノ
 入ルル○蓋ハ又と柄ノ間ニツルノ莖ノ葉ノ葉ハ花總ノツボ
 ツボモノツボノ故ハツボツボム○音義通入リ○萼鏝三字ノ形音
 義ノリハツボツボム○

○因云○樹ノ生木ノ體体○幹ノ身木○枝ノ大小與ノ同ト

大枝トシテ小枝トシテ此大枝即チ幹○極ノ樹ノ膀ノ

ノ柄ノ頂上ノ末梢ノ○標ノ斜枝ノ末梢ノ○圖ノ末卷ノ見ニ

剪花翁傳前篇總目次

搜索例

イ	絲櫻	二月七ウ	池ノ島芍藥	三月三ウ	一八州	三月四	
	薔薇	四月三ウ	岩ぬじ	六月五ウ	銀杏鶏頭花	七月ニウ	
	ハ	早白梅	正月一オ	貝母	正月ニオ	早燕子花	正月ニウ
		早白桃	正月ニウ	春木瓜	二月六ウ	春透百合	二月七ウ
		葉がらん	二月八オ	春藤瞿麥	三月十ウ	玫瑰	四月三オ
		馬蘭	四月三ウ	兔の花	四月四ウ	防風	四月十オ
		花菖蒲	四月九ウ	花石榴	四月十ウ		

初瀬夏菊 六月一ウ 早紫苑 六月三才 くらげ 六月四才

早神遊夏菊 六月六才 白山夏菊 六月八才 びん 七月三才

葉鷄夏菊 七月五才 播州猫柳 七月六才 萩 八月一ウ

八朔梅 八月二ウ 早水仙 八月二ウ 白露椿 八月四才

初あし 椿 八月四才 白青蘭 九月一才 濱あし 九月四ウ

早八重椿 十月四ウ 馬蘭 雜ニウ

二庭櫻 三月三ウ 二季咲躑躅 三月五才 日々州 五月三ウ

おき 五月九ウ 二季咲萩 五月上才

ホト庵 五月一ウ 牡丹 三月八ウ 鳳凰州 四月六ウ

郭公花 六月八ウ 鳳凰州 七月二ウ 鳳蘭 九月五才

本阿彌 五月四才

へ紅の花 五月八ウ 辨慶州 五月上ウ

ト童子挑 五月七才 虎の尾 三月一才 土圭州 四月十才

ららの尾州 四月上ウ 烏頭 九月一才 冬至梅 十月一才

木賊 雜ニ才

子兒梅 五月四ウ 月季花 三月三才 丁子州 三月七ウ

千州夏菊 五月一才 茶引 六月分 茶の花 八月二才

矮鷄檜 雜ニ才

リ綠萼梅 正月一才 くらげ 三月一才 兩面椿 八月十才

兩面中菊 九月一ウ

ル 縷紅州 六月ウ

ヲ 小手卷州 三月ウ
をぎ 六月九オ

黄金梅 正月ウ
嫩機樹 二月ウ
和紫苑 七月三オ
仙蓼 八月九オ

和唐ふに 七月オ
黄梅 十二月ウ
わごん州 三月七ウ
八月六ウ

とびとひ椿 九月ウ
から椿 二月ウ
唐桃 三月オ

力 河骨 二月ウ
海棠 三月三オ
燕子花 三月ウ
鎌山蔘蓀 三月五オ

高麗蓀 七月三ウ
風ふま 四月三オ
樂州 四月五ウ

唐子 五月二ウ
かん皮 五月五オ
寒きく 十月一ウ
寒蘭 十月ウ
寒木瓜 十月三ウ

蒲穂 五月三オ
ろりみ 六月七オ
川萱 七月二オ

川竹 八月ウ
寒きく 十月一ウ
寒蘭 十月ウ
寒紅梅 十月四オ

鎌倉 十月二ウ
甲州梅 十月オ
寒木瓜 十月三ウ

かん葵 十月三ウ
唐まの 雜一オ

夕 唐覆盆子 二月十オ
泰山寺櫻 三月一ウ
蘿蔔花 三月七オ
九月四オ

なんとう 四月五オ
唐萱州 四月ウ
唐擬宝珠州 四月十オ

壇特 五月三オ
唐桐 五月十オ
蓖麻子 五月十オ

竹 五月十オ
唐紫苑 六月三ウ
たひら州 六月六ウ

唐綿乃花 七月オ
たひらみ 椿 八月五オ
唐橐吾 八月六ウ

唐綿乃花 七月オ
たひらみ 椿 八月五オ
唐橐吾 八月六ウ

唐綿乃花 七月オ
たひらみ 椿 八月五オ
唐橐吾 八月六ウ

唐綿乃花 七月オ
たひらみ 椿 八月五オ
唐橐吾 八月六ウ

唐綿乃花 七月オ
たひらみ 椿 八月五オ
唐橐吾 八月六ウ

唐綿乃花 七月オ
たひらみ 椿 八月五オ
唐橐吾 八月六ウ

唐葦 九月五ウ

田邊つばき 十月三ウ

圓栢 雜ニオ

竹並小笹 雜ニオ

レ連翹 二月ニウ

蓮 四月ニオ

鷹爪 四月ニオ

ソ火蕉 雜ニウ

ツ鐘艸 四月ニオ

蔓つばき 六月六ウ

ナ菜乃花 正月五ウ

中嶋牛心李 二月七ウ

梨花 三月一ウ

瞿麥 三月七ウ

並萱艸 四月十ウ

夏黃梅 五月五ウ

南燭 五月七ウ

並白菊 九月一ウ

ラ蘭 五月分

蠟梅 十月四ウ

蘭香梅 十月ニウ

ム木槿 五月ニウ

六月ニオ

七月四ウ

ウ梅つばき 七月四ウ

茴香 八月九ウ

鬱金蕉 八月九ウ

淡櫻菊 九月ニオ

ノ凌霄花 六月分

能勢蘭 六月九ウ

オ阿福桃 三月ニオ

大手毬花 四月十ウ

大葵 五月一ウ

太田百合 五月ニウ

大山蓮 五月四ウ

万年青 五月六ウ

鬼百合 五月ニオ

鬼こころ 六月一ウ

れもづつ 六月三ウ

鬼菊 六月分

逢朽葉 九月ニオ

ク熊谷椿 二月四ウ

車返櫻 三月一ウ

九輪艸 三月分

くち葉 六月六ウ

孔雀檜扇州 六月分

高良薑 六月九ウ

東津 九月ニオ

ヤ 八重紅梅 正月才 八重雨下椿 正月四才 八重一重椿 正月四才

八重綠萼梅 二月才 山料櫻 二月八才 八重白桃 二月九才 三月十才

揚貴妃櫻 二月九才 八重山吹 三月三才 山いらご 三月七才

八重桔梗 六月才 山崎夏菊 六月一才 奴大菊 九月一才

や川で 九月四才

マ 松毬椿 正月才 摩耶紅梅 二月才 松本仙翁花 四月六才

木天蓼 四月七才 丸いさく花 六月四才 槇 雜二才

玄庵椿 正月四才 源平桃 二月五才 華慢州 四月九才

茨子花 四月三才 挾竹桃 六月五才

フ 豊後絞椿 正月一才 豊後梅 二月二才 ぬと蘭 三月四才

藤 三月十才 ぬら戸幕 四月七才 ふうふう 五月八才

扶桑花 五月十才 冬牡丹 八月七才

コ 辛夷 正月七才 小うめ 二月九才 五月桃 三月才

厚朴 三月六才 駒止 三月七才 小手球花 二月才

紺菊 四月才 小町州 五月九才 國部繪扇州 五月十才

金剛山 六月七才 紺紫苑 八月四才 小まら菊 九月一才

小金ら菊 九月才 腰蓑椿 十月才 江州猫柳 十月二才

小藤椿 十月三才 五葉松 雜一才

工 金雀花 二月九才 江戸櫻 三月一才 化偷草 四月一才

猿猴州 四月五才 蝦夷繪扇州 五月十才 えんさく 雜一才

新編前篇卷之一

テ 鐵線花 四月八ウ 天神花 七月四ウ 天神絞椿 十月二ウ

ア 赤菘 正月四ウ 紫羅欄花 三月二ウ 鶯宿梅 二月二ウ

牛心李 二月四ウ 淺黄櫻 三月一ウ 青木花 三月二ウ

らびま菊 三月八ウ らびみ 四月二ウ 漢蓀 四月二ウ

青のり州 四月二ウ 紫陽花 四月五ウ 鸚鵡 四月十ウ

薺 五月四ウ らびま州 五月九ウ 秋藤瞿麥 七月二ウ

秋の山椿 八月四ウ 葦 八月八ウ 秋透百合 八月九ウ

秋菊 八月十ウ 秋擬宝珠州 八月十ウ 秋神遊菊 九月一ウ

らびほ 十月四ウ 赤苺子椿 十月三ウ 山丹花 三月六ウ

サ 笹葉椿 正月三ウ 山茱萸 正月五ウ 山丹花 三月六ウ

櫻うの花 三月十ウ さくら草 四月三ウ 杜鵑花 四月十ウ

澤桔梗 六月六ウ 山茶花 八月三ウ 笹龍膽 九月一ウ

さむぎ 九月一ウ 三色椿 十月一ウ 宰府椿 十月一ウ

キ 菊花梅 二月一ウ 歩く桃 二月九ウ きり 二月九ウ

金仙花 三月四ウ 霧島躑躅 三月一ウ 金樺 四月一ウ

五柳 四月五ウ きりけ 四月七ウ 京百合 五月一ウ

きりん州 五月三ウ 擬寶珠州 五月四ウ 金絲梅 五月一ウ

桔梗 六月一ウ 玉簪花 六月三ウ 貴船菊 八月一ウ

金紋菊 九月一ウ 櫻梅 二月八ウ

エ 雪柳 正月六ウ 十月四ウ

メ 芽柳 二月三才 妙蓮寺椿 九月才

ミ 渡山櫻 二月九才 水むせみ 四月才 皆川白 夏 五月二ウ 秋 九月ウ

水けりひ 五月十ウ 鼠尾艸 六月三才 引草 七月才

水款冬 八月十才 峰乃雪椿 九月四才 緑松 雜一ウ

シ 自在門梅 正月五才 四手辛夷 正月七才 垂絲萼梅 二月才

白とみ椿 二月三才 紫丁香 二月七才 射干 二月七才

自然居士櫻 二月九ウ 蜺花 二月九ウ 盐竈櫻 三月ウ

桜欄の花 三月今 四季咲菘若 三月十ウ 五月十ウ 白うり花 四月才

石南花 四月三才 白蕃薇 四月三ウ 紫蘭艸 四月四才

芍薬花 四月四ウ 車輪梅 四月八ウ 沙羅椿 四月九ウ

志もほひ花 四月十ウ 縦斑蘭 五月九才 桜欄竹 五月十才

秋海棠 六月七ウ 七月梅 七月才 白豌豆 十月三ウ

白苺子椿 十月才 新家白椿 十月才 白とみ紛椿 十月三ウ

垂松 雜一才 志らぐ松 雜一才

ヒ 彼岸櫻 二月七才 緋桃 二月九才 美人艸 四月九才

いー 四月十ウ 姫ゆき 五月二才 金絲挑 五月五ウ

晝白 五月才 檜のき艸 五月才 百日紅 七月四ウ

美人蕉 八月九ウ 日の丸 九月ウ 飛龍 十月一ウ

一重山吹 十月才 一重雨椿 十二月才 姫小の 雜一ウ

モ 物ぐさひ椿 正月三才 最上百合 五月才 木芙蓉 七月才

紅葉楓 九月牙 木蘭花 十月牙

セ 石竹 四月牙 仙臺萩 四月牙 錢葵 五月牙

仙翁花 五月十才 豆以大輪椿 八月牙 猩々 九月牙

ス 蕨枋梅 正月牙 角の倉椿 二月牙 蘇枋の花 三月三才

とん 八月ウ 睡蓮 八月牙 水仙花 十月牙

剪花目次 搜索 畢

補添升水方 並 別傳合六十七員 自一丁 至五丁

附方目次

温室冷害之辨 附一才 挿花撓枝之方 附一ウ

古木切口墨打之方 附一ウ 挿花剪口之辨 附二才

逆灌て厥入花之更 附二才 萎凋花葉と穂回と傳 附二ウ

季花並葉と撮口訣 附三才 盆栽之辨 附三ウ

椿並山茶花摺之方 附五ウ 同時節之辨 附六才

株接牡丹捷木之方 附六才 接木砧之辨 附六ウ

寄接之傳 附七ウ 切接之傳 附八才

移樹之辨 附十ウ

新編 剪花目次 前篇 卷之一

○黄金梅

花一重色淡黄なり 開花正月初あり

○豊後絞椿

花八重 色無地紅なり又中紅地小濃紅絞あり

一枝毎小花咲交々 開花正月上旬冬を温室小入之 方日向西

北塞一所 地二三歩湿り 土回塋 肥大便寒中へ

且樹の大小ニ應じ濃淡り斟酌之 移春彼岸まで

接奇接之 椿乃櫻方下下の條小攀り 開き葉の中

り食塩と一撮入水二三滴おろし置其枝落どて罨

保つ諸家へ是と秘傳とせり 己下諸椿方並同

○ト菴椿

花八重 色中紅絞之 形芥子椿相似り 開花正月

上旬より二月下旬までなり

○貝母

花之さく 色緑と黄と白と相和せり之を赤黒丸

鹿の子の班入り 開花正月上旬 方三步陰 花のふり日向は

まきや夏月早と厭り 地一歩湿 土壘土 肥淡小便水七歩七

寒中まで焼くべし入寒より油粕と少く入し 分株移

十月より 水よごれとまきを切は焼く逆水とせ

○綠萼梅

花二重又八重二重あり 畧して綠梅と云 信玉萼又玉

梅と訛り唱へり 花色潔白萼至々綠故小名々 開花正月

中旬之 夢り亦同 青緑と清雅あり称美とせ

○早燕子花

色青く尋常の花種 開花正月上旬 方陽面

地 此地乃や倍小堀技と称す此井水の晝夜湧流く水涯の南陽

受ける斤下り地小株と植く西北の風寒よく固く此水の温暖

かろく入るる春中花咲く此花初夏の頃も花咲きつれど

暖氣をかりての平常の花より却く逢く 肥 淡大便秋彼岸小

根際よ溜り水と二日ごり干上根本より高れ方より若し肥と入ると三

ごり干切て後此水と煮入る 分株 三月燕子花の條より

○早白桃

花二重又八重なり 開花正月中旬より 漸く咲く

方地土移接等直方梅小同 蓋桃を花すふ淡小便

澆へ 己下諸桃育方並び同

○松毬椿

花八重重 色中紅 開花正月中旬より 三月まで花なり

花の形中葩高く縁よ出る葩段低くもりを松毬の

○笹葉椿

花二重二種なり 色紅又紅白紋 葉形長く 葉

葉ゆ 開花正月中旬より

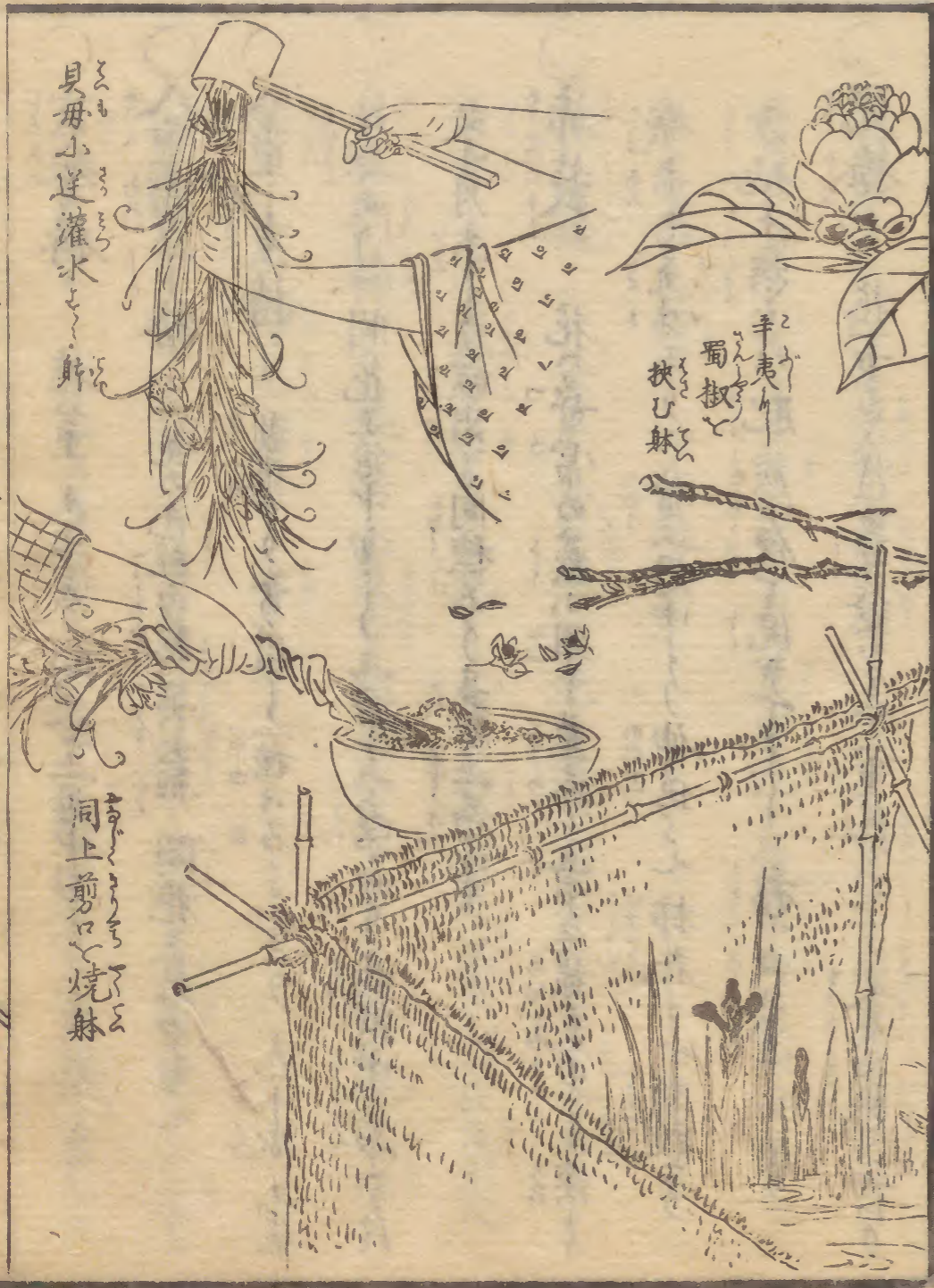
○物狂椿

花二重 色白輪 紅輪 紅白點斑一輪 紅白筋斑一輪 紅白紋輪

是の 毎輪交雜して咲く物狂の名なり 開花正月中旬

此花と中品と又九月下旬小咲く物狂より 最美麗き花

是を上品とす



○玄菴椿 花八重 色淡赤 開花正月月中旬より二月盛あり

○八重雨が下椿 花の色紅白絞 英大輪 開花正月月中旬之

○八重一重椿 敷花より牡丹より一種名をさまり 色中赤 又赤

紋斑あり 開花正月月中旬より三月まで咲あり 是は中品より

又十月赤より咲出同種あり 是は上品とせ

○赤菫 花の尋常の菫小同ト 莖赤く葉を綠色少く淡く

微赤き気味あり 蕾正月申より伸出之 挿花して頗雅あり

方地土摺る 肥淡少便と焼ぎてよ 移 秋彼岸より

○兒梅 花二重あり 八重見重なりと八重見といへり 又更紗兒といへり

花二重なり 淡紅小濃紅あり 形も同ト 開花も同時より

正月下旬より二月まで咲之を更紗兒の菫蕾とて花咲り

色淡くあり

○蘇枋梅 花二重 色濃紅 開花正月下旬木肌より心小至まり

最赤より蘇枋の名あり 此花より以後の梅は温室に入れたる

○自在門梅 花八重 色淡赤 開花正月下旬より咲之實の味は

勝り 挿花小用ひく賞なり

○山菜萸 花色黄之小細かる 英群簇く 枇杷の實一箇ごりの光を

房でせり 開花正月下旬より彼岸盛之 方日向 地土摺る

肥大便寒中入ぐ 分株櫻春彼岸まぐ 此穂新菱大さ
 指許のものば小枝と番く切拂ゆく打ぐ 扱寒中花いざと頭を
 ざつ時其開雅ちりと茶席の賞とん是より時節少く後て温
 室入花半開て挿花小元とぐ 木小雌雄あり雌樹の花最勝と
 あり 予一曰取樹の扱小此枝二本と不図逆立にせし二本も自
 ころ根と生ぐ芽茂まりかまぐ此他の樹とて逆立とて其根
 とも生ぐる葉もありぬぐ 竹の株際小芽は備りぬを打りて
 根生して枝繁まりかまぐ逆様竹は奇説も奚ぞ怪しむらん
 ○菜の花 種類多し花の色は金も黄も聊あり大なり俗はかづ

菜は油菜高菜は若菜雉子菜等あり 桐花正月末
 より諸菜花漸く尋て咲之七月下旬より八九月迄漸く種とまぐ
 就中てかゝる菜は起葉と卧葉と二種あり起葉を花莖高く
 伸るなり此花を四季に拘るぐて咲のむたの蔭も四季に
 かゝるは 方向 地土とるぐど 肥淡大便初小く下種と
 ぐ 芽生して後淡小便と度と澆ぐ 又冬茶とるぐも
 けりて花と剪置とるぐを萎凋とて切は直らね未葉とて
 付て保とてるぐもあまぐ是の少の花少く手葉も是るべ
 あまぐ剪花者の後初も二把三把の花と切得らんつる未

薬のたるるをさねを切置て花莖を凋落せしめて心せざらん
把て逆さぬ小水一冷水と灌ぎ少間して水器を生置翌日用ふ
ぐたをひ凋むも逆水とて水を當日も用ひらるるもの
此種類は皆も育方同ト

○雪柳 花の色白小英葉の間毎小出と 開花正月末 方半蔭

地二分湿 土撫らん 肥小便節と又花前二度澆ぐべし 分株

移とも小秋彼岸

○紫羅欄花 花の色赤紫古株の五年に及つものへ開花正月

未と咲けり 方日向 地一分湿 土回壘 肥淡小便春早より

西二度澆ぐべし 水升がうけた時を剪口と酢煮とせし

○辛夷 花八重もつ之きまれ 色淡紅 開花早きを正月末より

三月まで咲之 方日向 地二分湿 土撫らん 肥大便寒中入る

接木蓮華砧小春彼岸 寄接小とせし 移秋彼岸より

水の自然より升るるもゆりゆりの上より下は切は割く蜀椒

三四箇木共大小鷹ト 扱て水器小入れた水より後挿茎よむ

○四手辛夷 花の色淡紅形四手のごとく下小垂を咲之 開花

正月末より 育方水升の方共小辛夷小並の同ト

○童子桃 花二重又八重あり 色濃紅 蕾正月上旬より湿室よ

入之自然咲ハ正月末より二月上旬迄咲公重ハ二月上旬より同月中旬迄咲白桃ハ
 温室小入より十二月廿日頃より總て桃類の温室を花出する時ハ葉もま
 芽と出だんり花出ぬとまや日とまらく温室小あけを赤き花
 いろわかれ 変りて甚見苦く又白桃をまより白きゆふ
 変りて葉は芽黄白く後て見苦く是其蒼蕾の節り
 芽と出だんり花出ぬとまや日とまらく温室小あけを赤き花

二月開花之部

○ 菊花梅 花千重形之くく小菊小似たり 開花二月初かり

○ 角の倉椿 花千重葉かき 色濃紅小白班紋あり 開花二月上
 旬より三月下旬まで花あり 正月中より温室小入より下旬まで花出
 形大きく外葩大く心小至り漸く之く開花残まりの玉とあ
 りて花心とわくは是角の倉り本形はて最賞となき花之
 ○ 八重緑萼梅 花の色白く 開花二月上旬 此花殊小勝まり
 ○ 岳緑萼梅 花重色白く 開花同上枝より七雅曲りり賞となき
 ○ 摩耶紅梅 花重色濃紅 開花二月上旬より初午盛まり
 護條青緑くく最美ありもの
 ○ 豊後梅 花重あり八重りり 色淡赤りり中末りり 開花二

新花翁傳新編卷之二

月上旬 挿花して愛さるゝ實は殊小美秘に比 予う園中り
植育つゝもの花重くして色中紅より子の大き二升小十六のりには
肉味を晩桃の如く氣味厚く皮薄く核せきし干梅り
かして爛きん形容全し

○鶯宿梅 花重色太白形大輪 開花二月上旬 賞翫さるゝ

實を危丁に所謂煮梅と称する中を最上品なり

○連翹 花黄色 開花二月上旬 温室咲を正月上旬之 方日向

地三分湿 土摺をど 肥淡大便寒まへん 移摺も春彼

岸より 立枝の雄木の垂枝の雌木より雄木の方よりとん

○芽柳 加賀柳の大きより之 餘柳を芽餘色して中より之

白芽柳 黒芽柳も中に中より之 都て垂柳の春嫩葉延出

と剪花者の青柳とより二月の頃水升ぐぐ嫩葉萎凋ひの

是は逆水して横少ふし葉葉の類して色も置べし少間し

活らぬり或は鋸目と入く水小杆置もよ 摺は早春し

○白角倉椿 花千重色白 開花二月上旬より四月まで有り

其大き又外葩も大し心小至り漸くせきし開さのころ

の玉より花心と頭より元より葉を 剪花者略

てあつとよみ呼り上品とあり

○河骨

萍蓬州

花黄色なり紅あり濃紅あり又黄花小龍甲の

斑入葉あり又至く定きものあり是と姫河骨と云 蒼蕾二月上旬よ

り切之 分抹 移春彼岸之 水田植くまの冬を多く生とれど丈

短う水深ん所小植くまを数少もなれど莖太く花葉共長く

大之とて黄花の常はぐく 赤花の蕾青黄くして漸く淡わく

開て後赤くあり濃紅を蕾より赤くして開けの益赤く極上

紅小かり是と上品とんて剪得ても水の至く上かきし是と

冷井水と切りより水彈とて弾きけしむく水の升かきし

莖葉の表面よりくくくものかきして挿花器小生く此水彈と

竹筒或は銅筒ふとて彈くもらきゆいまご至くは又莖葉も動

揺して萎いむむらりされを世倍よ用う所の木作の之を

水彈甚よたとの俗小ゴビスイとい疑らるる小備水の字をう

是のくくもれが薬水と用うたやうなれど亦時小態く

施とんぎ為り左小是と攀らり

○水飛の唐滑石水と和し白く程よく掻きと ○焼明茶二分水合

○川考ニ友し水合の煎湯 右三種の内小をとも方よりと彈と詰もは

○牛心李

即地

花重あり一重なり 色濃紅 開花 春彼岸中

方局 地土撰いん 肥大便寒中入 移土月より正月迄は

温室を二重花の三日とて出ると八重を五日とて出るとありとれ
蕾のちやうど花の多少もど其時の趣よと一夜入るとも亦
三四夜入るとも其短長を定めざると水はよく升るものあり

○熊谷椿 花二重色濃紅葉太く大きき 開花二月中旬

○唐椿 二種花八重色紅又紅白絞あり 開花二月中旬より三月

下旬まで花あり寒冷の風土小くして尚四月中旬後も剪出たり

○嫩機樹 數種 即若芽紅葉二月中旬 方日向地二分濕

土回莖 肥大便寒中にへ 移秋彼岸後より十月頃まで

○毛羶 ○縮緬 ○定家 ○山 ○青海 ○綠青海 皆も芽出

至く赤く葉満開て後青く秋淡く照之毛羶殊ふらう
青海の葉七辨して色亦深くて長くうらうらう。野村色紫
とて秋も同じ色あり紙に描寫する紫のり。○一行寺芽出
の時を少く赤く開れ満てを青く秋を枝群翹之都て芽
出の枝を水上とて是を枝本と水小入るとれり程の長
鋸目とて汲立の水とて逆水とて水器に生置勢ひく水と上
之の目と経ののち口とて焼きて此切口と切捨木通の末
水小和し其中に漬置くと後挿べ
○源平栴 花重色白輪紅輪 白葩紅葩交輪 紅白絞輪もど

花系傳前篇卷之一

藥材前傳前篇卷之二
二月五
廿

金雀花



葉牡丹

莖伸て花咲特又大玉葉も漸く伸廣がりて歩
乱れ形を我りり心玉の如くして
外葉段に擁抱て大の葉牡丹の如く形姿も
摸るべき時節の異なりて其小く



葉牡丹の如く
葉の如く
葉の如く
葉の如く

嫩柳



洋蓬艸の廣葉よ
虎尾水りて
升水ノ弊

花前傳前篇卷之二

一枝の内ふ種々咲雜之 開花二月中旬 此花至て麗しき此
 樹と初て産し設る方あり 夫八重白桃八重緋桃もどん實の登る
 こと甚希なり然るに偶登るは採て蒔小木とるを赤木
 白木と接又白木小赤木と接此赤白の接穂小登まる核とまて
 蒔て生じむ木小咲花即源平とあり是中らばとも遠く
 ざるの理あり二重花の白桃淡赤の種々小交を咲出さる
 既より是を常々桃砵小重の白桃代接し穂小登る核乃
 自然生くるものあり是砵桃の淡赤色の蒔せしめり

○春木瓜

花の色濃紅あり白あり されど白とて淡赤と含り

潔白なるもの 開花二月中旬 方地土肥摺を分株より出芽を分

○紫丁香

英下子の如きもの 檜葉て二房を成り 開花二月中旬

香氣強し葉小白に覆輪班かきもろり 方三分陰 地二分湿 土摺を

肥 淡大便寒中へ 花前小便をぐ 移櫻もに春彼岸よ

○射干

胡蝶花 花の色白小紫點あり 開花二月中旬より四月最中より

方半陰 地土肥摺を分株 移春彼岸

○彼岸櫻

花二重又三重形之 開花名の如く春彼岸の頃 方日向

地二分湿 土砂をふり 肥大便寒中へ 移秋彼岸 株山

料櫻の種々春彼岸より蒔く砵 諸櫻を寄口接小を芳塾山

前花前傳前

皆是山料櫻の自然生あり後世此種と山料櫻と号したり古々

山櫻との呼ばるる己下の諸櫻育方並に同ド

○絲櫻 花重 開花彼岸の頃之 枝は厚く長く垂る

○春透百合 花淡赤色 開花二月下旬より三月中旬迄あり 方日向

地二分湿 土回塾 肥 效土とす 淡小便秋彼岸より春花前迄月々

三度宛澆じ 移秋彼岸より 己下の諸百合育方並に同ド

○中島牛心李 花重あり重なり 色濃紅と云々牛心李は果の味は

開花三月下旬 方曷 地土肥 換ぐ 移十一月より正月迄より

此枝水の上のぬもの一夜を越すと云々此の切口は復切之此切

中其きりばぎ所と檢腐め折ぐはて切ぐかそれの切口爛る故小水く

升りて翌日夕方まで保のべ其後を保ぐ

○葉牡丹 花葉の花の如く色黄へ 開花二月下旬 方地土撰いと

肥 淡小便冬より春小至る三十日許小三度澆ぐべ其後小油粕成

置六芽よく上あり 櫻春花の前は根を吹る芽を缺て即時小杆へ

春は土用より至秋うけく杆の根をよく下まで三歩の小便と度く

澆げ秋は未より冬にうけて大の葉牡丹あり 秋より冬小かけく

杆を活とれども春まで悉く花小成り葉牡丹よりはさき又四季

もれ芽と撰ひ杆は皆大葉牡丹あり此芽のえび中へ言筆を解

新刊 剪花新傳前篇卷之一

二月七

三

なつた彼岸櫻とて深山櫻の剪伐しても新條く出さぬ

○揚貴妃櫻 花多重開花二月末形似花鹿

○蜆花 花蜆の肉の如く 色白 開花二月末より三月まで

挿茎小を用ひて秋紅葉とて山園雅あり

○桐の花 花の形は桐麻の花に似れ最大 色濃紫 開花二月

末より五月上旬まであり九月上旬より蒼萌なり 升水の方の嫩樹同

○金雀花 又雀見花 色極黄形は蔓豆の花に似たり 浪花松山小

ての開花二月末より咲北の五箇山とて三月末より四月まであり

方向地干 土砂雜肥 油粕 摺 春秋の両彼岸ともなりよく育り

時三四月より五六尺小やぶ 移 三月末まで活生易く日陰湿地

に植むと枯れ挿花は四季ともを用ひて賞あり 五ヶ山とて山とて小

あくと畷野村とて蓋畷野村の檜州川辺郡山下谷とて廣原小とて

同郡多田郷より半里許ある北山とて詔止則ち山下谷とて此村の奴碑とて各

日山小とて刈取所の薪柴五擔とて一人終日けりて充てり

故土俗此村と異名して五ヶ山とてありと也

○唐覆蓋子 花重 色白 開花二月末より三月まであり 方二分

地三分湿 土根むと 肥大便寒中入る 下種春彼岸 分株春彼岸

よ芽出く筍の如く 是と缺分植て 移十月之葉の葡萄の如く

新撰花譜前篇卷之二

此月より紅葉して散ざるとの頃春を挿花ふりし正月月中旬より
彼岸ふりて若芽生じると用ひあり

剪花翁傳前篇卷之壹畢

剪花翁傳前篇卷之三

三月開花之部

元日立春之例

○五月桃 即早桃 花重 色淡紅 開花三月三日前後之

○唐桃 花重又八重兩種とも色白なり淡紅あり又海平なり 花目狭

ほくかり 開花三月上旬挿花又多分二重を好し用ふ

○阿福桃 花八重あり重二重あり 色潔白 開花三月上旬形葩内小屈

大り平らうかり頗る奇趣あり

○虎の尾櫻 花八重開花上已後之

剪花翁傳前篇卷之三

三

廿

○鹽竈櫻 花重 開花上と同ト

○車返櫻 花重 開花上と同ト

○江戸櫻 花重 開花上と同ト

○泰山寺櫻 花重 開花上と同ト 御書に泰山府君櫻と見えり是より是より

○浅黄櫻 花八重 色淡萌黄 淡黄白 含みたるより 開花上と同ト

上車の山料櫻より己下の名櫻と剪花者の是と本櫻と称せりの出津の

國邊にては春年内に在る開花上己の頃之に春歳の始不在る開花三月十日頃之

京都より五日許おはじ大和の京都より後より七八日之

○梨の花 花白 開花三月上旬 方日向 地分湿 土莖雜土 肥大便寒

中之一 移秋彼岸より十月迄一 接春彼岸後切接みとべ一

○紫羅襪花 花赤紫 開花三月上旬 方地土肥ハ既ハ正月の條ハ

見えるより下種秋彼岸ハ苗代小苗一 翌年五月分株以今年花

いまこのりハ又翌三年目の三月分至テ花濁ハ 初メ咲ク四年目も亦三月分花

あり叔五年目大古株となりてハ正月末花咲けり 暖地もなりハ若根

その花偶ハ三月分咲くより下種秋彼岸ハ後ク時を春彼岸小苗

代はてもくレ其年の五月分移とべ 水升がらん時を切口と酢煮とべ

○青木 藩淡檜葉茶色 花紺紅色之 開花三月上旬 冬月実赤一

方六分陰 地半湿 土莖交肥とらん 櫻春彼岸 葉小虎斑あり

龜甲斑あり斑ありを卑し枝甚青緑し實のあがり落く芽
出るもの生育易し花実葉とも小挿花に用ゆ

○八重山吹 花の色黄艶重吹り之し開花三月上旬 方東南向

三分陰地三分湿 土莖雜肥 淡小便八月小澆ぐべし又冬月より寒中より澆
ぐべし花を中咲分株十月より寒中迄よし春を剪得ても葉萎
凋あり是を切口で叩き挫だ酢とりよく煮るべし

○小手卷艸 花の色紫らり茶らり 開花三月上旬より夏 方半陰

地一分湿 土三分湿 肥淡小便 下種 移春彼岸 氷井りたるきと
切口少し切逆水して後し水器小軒置く

○海棠 花の色淡赤 開花三月上旬 方日向 地三分湿 土一回莖 肥大

便寒中入し 移秋彼岸より寒前までよし 一種とせしつらり莖長
く風搖し櫻の莖の如し 接ぐとも春彼岸切梅小とべし

○林檎 花の色淡赤 開花三月上旬 花葉ともに海棠小似たるが
よし約すそ力あり三月方海棠小同し

○月季花 即長春 花蕃薇より夾赤し又莖枝も約して低し 開花

三月ふきても暑寒と厭ふべし 元四季共常に咲たり 方日向 地三分湿 土根は
肥干鶏油粕二月上旬度九月上旬度念し 櫻春彼岸 移冬月し 此木
高し五六寸し七盆栽小花くものり 倍小朝鮮いしと稀く環

賞と是のこがと小形つくり小作り縮ちぢるもの之い下したの蕃薇せうい育そだ方かた並ならび用もちド

○庭櫻 花千重 色太白 開花三月中旬 方曷地三分湿 土をくま

肥小便春彼岸 移秋彼岸後うま後ご 花の形かたち山吹やまぶきより半な樹き細こく長なが三尺さんせき垂た

寸偶すんぐ三尺許さんせきごほりもわり幹枝かんしも小屈こま曲まじて直す伸のびより是これ真まの櫻さくらの種たね類るいより皮かわ

○蕪枋花 小英群こゑぐん房むらとあり 色赤紫あかむら之の因よて名な 開花三月中旬 方

地土肥ちつちえをく夏なつの土用つちもち種たねで収とむ株かきを分わけても枯かるとはり春彼岸はる小

下種したねと比ひ此こ芽生めえと翌年あしたねんの春彼岸はるに分植わけうゑべ 水升みづあがりがうう時とき其その皮かわ

よ剪刀いさな疵きずで付切つ口くちと二三さん割わりく水器みづがら小置こおきバ水みづくよあり

○池の島芍薬 花常つひ其その芍薬しやくやくの上うへ花はな小同こどう 開花三月中旬 方

氷升こほりあがり等らの本もと芍薬しやくやくの條じょう下した小見こみえより

○金仙花 又金盞花 色赤黄あかき之の常つねの如ごとく秋あきの彼岸ひる下種したねとれ

開花三月中旬より四月中旬しまであり 方曷地かたが三分湿 土をくま

肥こ淡小便たんせうべん 下種したね布肥ふこをま花はなまま小淡小便せうたんせうべん五ご六ろく度ど澆やべ

五六月ご小こ蔀すゐが冬ふゆより春はるふふけけ咲さく又七月またしちがつ小こ蔀すゐああと秋あきの彼岸ひる蔀すゐと

同時どうじ小咲こさ之の故ゆゑ小時こじささるるのゆゑなり

○一八艸 鳶尾花 花三種はな白しろあり青あおり青あおらら蔘じん等ら 開花

三月中旬 方曷地かたが三分湿 土をくま 肥小便せうべん寒さむ申ま澆やべ 移うつ十月じゅうがつ之の

○大藺 莞かん小英こゑ蔕たがひり結むすぶ 開花三月中旬はなここれれ二月ふたつきより莊むら若わ

花傳前篇卷之三 開花

厚朴前傳前篇卷之三

三月

分株下種ふくせの春彼岸はるのうらの贈たまは生なる故ゆに方地かたぢ
土つちの意いは任まかせ盆栽ぼんざいはて風眺かぜながり此時このとき肥油粕あぶらかす又また田作あぜ三筒さんじゆんより五六
筒見合つとあはせへべへ大小おほしのり太おろ俗く不ふ畦釣あぜつりる挿花さしはなるのりひど
止ときと用もちふ是これと黒葡くろぶらふ又黒葡くろぶは横小段よこせうだん班はん入り地植ぢちを長丈ながぢり
ふん班はん扱あつつ魚い載ざい短たん小せう丸まるを班はんく入い之の班はんの長丈ながぢのもの最賞さいしやうふべ

○燕子花

此花多種このはなたふとく之の其その五種ごしゆ左ひだりの如ごとくの花はなもも開花ひらく三月さんげつ中旬ちゆうぢゆう之の橋姫はしひめ

花中心はなしん青あおく縁白隈えんぱくがり○村雲むらぐも花名はななの如ごとく○吹墨ふきすみ白地しろぢ青あおき吹

点ちりり○濃紅のうべに紅梅色べにばいしき淡青たんせいと含ありり○淡紅たんべに淡赤たんせき白淡青しろたんせい白しろ帶おびり

○白極しろきよく白しろり垂白たれしろり○藍あゐ大輪おほりん濃色のうしきり並花なみはなり○六肥むつち肥ちりり

倍小ばいせう是これと六葉むつぱり此花このはな小青色せうせいしきはゆはもも変色へんしき花はななり六陽面むつやうめん地水ぢすい
辺への湿地しづみぢり常とこに水みづの帯おびりぬぬりはとと肥ち淡小便春芽出たんせうべんしやうめ前まへ小せう澆ぢやうり
下種かみまね春彼岸はるのうら小せう澆ぢやうりはとと成長せいぢやう逢あり分株ぶんぢゆ春秋しゆんしゆ兩彼岸りやうのうらももは分株ぶんぢゆの
方かたへ念ねんき株かぶと地中ぢちゆうを缺かりりへ残のこり親株おやかぶ動痛どうつうりはとと榮さかる中ちゆう

○鎌山藻蓀

花青紫はなせいし形かたち大おほき開花ひらく三月さんげつ中旬ちゆうぢゆう方かた日向地ひなたぢ二分湿土ふぶんしづち

莖交かみま肥小便春芽出あまべんしやうめ前まへり花前はなまへまで三四度澆さんしやうだりり分株ぶんぢゆ春彼岸はるのうら十日じふにち
前まへ小せう澆ぢやうり燕子花つばなより高たか尺ぢゆう所ところり水氣みづきの少すくき方かた志しるるへ

○二季咲躑躅

花葉はなはもも常とこのほほととりはとと杜鵑つばき花はなに似にて色いろ少すく淡

一ひと開花ひらく三月さんげつ中旬ちゆうぢゆう方かた日向地ひなたぢ一分湿土ふぶんしづち土土つちつち肥ち干鍋かんか寒虫かんちゆう而已のみ入いる

新編花譜前篇卷之三

三月

五



河州川田村の紫藤の房
長き一五六尺あり

山丹花

春牡丹

新花譜前篇卷之三

三

五



蕾

花

中開

移秋彼岸 櫻春彼岸 秋の閑花の九月下旬より咲く来春迄此々咲續く

たり水升ぐらん時の切口に叩き挫くも亦割て逆水に氷器を杆置べし

○山丹花 花の色初淡赤く中頃紅色後極紅之形紫丁香の花に似たり

閑花三月中旬より四月も花なり 此外年中花の閑る時あり 初中後色

三段小變りたりて俗小三段花とあり 方日向四月より八月まで葎簀

と覆ふ 地盆栽九月より三月まで地窖に入るとあり 土回壘肥油粕 移

三月 櫻春彼岸過より又梅天の珠更は 葉の形ち山梔子の嫩の如し

○厚朴 俗小ほうの本より花八重重色白形木蓮花に似たり 閑花

三月中旬葉先出後花咲たり 是山生のもの故り 育ち隨意り

まへ 丹波路り多く産す

○山覆盆子 花重色白形ち錢葉に似く葉を五加子に似たり

芒刺り 閑花三月中旬 方地土を肥大便糞中へ 下種

分株春彼岸より 移十月中

○蘿蔔花 花白又白淡赤紫気味あり 閑花三月中旬 さそ切

置 萎凋したもの之菜花と同く逆水にて姑置の後立直るとあり

○瞿麥 花數種 閑花三月中旬より五月最中尚七八月小至りも残り

方地土を肥淡小便凡一年中折見合を澆べし 下種 秋彼岸

して翌年新株は常夏の株小咲く花も殊更なり 剪

花時辰の刻より午の刻に限らずに剪て直小莖中まで水小杆置之

○駒止 花の色赤又赤白絞あるに 開花三月中旬 育方瞿麥小同し

種も亦同しとを莖葉太く厚くして白粉と帯り 捲春株より

出芽と彼岸小缺てささぐり又五月よきも

○丁子艸 花青色 開花三月下旬 方昌地二分湿土回莖 肥淡小

便寒中雨三度花まふ二度焼く 分株移春彼岸より

○黄金艸 花黄之形 索吾の莖のこく 中葩の薊小似り 莖一輪長八

九寸葉を此葉不似り 方半陰 地二分湿土回莖 肥油粕と目り

盆栽とのあり故小其心とさぐり 開花三月下旬 下種分株移

ともは春彼岸より

○吾妻菊 花重色白 花葉莖皆もに蒲公英に似て葉厚し 開花

三月下旬より四月上旬 咲之花長く保つ 方日向地二分湿土搗り 肥淡小便

寒中に洗ぶ 春芽出揃ひし時油粕とねじ 花よくさへ葉の色も濃

かりし種 五月小取て翌年春彼岸より 分株移 春彼岸より

○九輪艸 花重色赤白二種 開花三月下旬より四月 方二分陰地

二分湿土回莖 肥油粕淡小便折と洗ぶ 種扱き 分株移 春

芽出前 花莖長六寸節を 花形らさる 艸の如く房の形ら

莖頂の每節小一段々 數の莖節と遠りて咲之 恰塔上は九輪小似り

○ 桜欄花

花黄色形ち魚卵の大ききありの似たり 開花午後頃

咲之此時黄粉散乱と 方地土肥えりむと 下種秋彼岸より 実の大き

南燭の實より少し大きき色淡玉子に青と合めり花実葉より挿花小用

○ 牡丹

季四月末まで剪花者好で蕾格と剪て以て春牡丹を稱

花の色赤淡紅中紅濃紅黒紅底紅紫白朱渚色斑入等 花名數十

種牧舉とてうだ開花三月末午後頃之方西西北の塞より所

春彼岸より専ら風透とよくとて 地花壇三分湿 土回莖 肥寒中

大便 移春彼岸又立冬前後より 接春彼岸切接とて 春芽出

前油粕と入べり又十日をり経く一度又同く一度都合二十日小雨度許

へ花の時小雨覆ひとて夏月炎天小雨散算りて日覆ひとて花辰の

刻より開たり直花乱と花共小約やと平く未の刻より葩収て葉挿

ひ色ひ翌日亦開くと昨日のじし是のころと五月小やと上花と下

花とて開り形ち約うら平く葩外裏小反く聊も葉と挿ひ色

より葉莖とてりて四方と圍ひ油障子と覆ひ天日と隔て受へり乃余

朝開花とて又今日開くべき蕾と明日迄保てせん若莖而已と昨夕

剪て逆水とて水器に入雨風の當り冷陰の所におく冷寒なり愈

夜小く水器と共小紙袋と覆ひ外の庭お置く雨も亦厭ふへり

夜分冷氣強一断して明日すて開くんぞ推技よく水升のあられ
若上り時を切て焼く逆水とて水器おぬく井入やへ一又長枝
好む古枝をかひく切の水とを是ハ切て割く蜀椒と五六箇挾て切り
花器の水際まで前カクを鹿皮と所前刀痕を八燻して逆水とて水
器お井入置へ一此業を平生の挿花にも用ふ一因ふ云千兩牡丹是春牡
丹の二種之開花も前方も上小同一花の色初開を極紅して中増白く
後を淡紅おぬく毎一輪お是のこゝ色まき此樹ハ池田北の口より
三町許北木の部村牡丹屋嘉十郎の庭中小在是一家の珍花を剪花者
の扱ふものおぬれゆ名種たるはゆて出でり

○藤

花紫白 開花三月末より四月より咲方日向地温土よりまら

肥大便寒中平日の入ふ及びを 株尋常の花の春彼岸より蔓と地中に伏
根生して後切取も一又同節お株と取分も一 名物の花ハ
多分盆栽或ハ棚お懸登せありて取木ふか一 故お替ひゆれ株と
ゆて寄接おぬべ一 因ふハ河州刈田村の左官が母屋子宅両家共
小庭中より房長きと五六尺お井入へ近世の名賞とて水升
の方ハ切口と叩き挫ぎ半時を酒小井置其後よく焼く冷水小井置
後用ぬべ一又方花器小上酒を湛く切得たり其ま挿花よぬべ一
○櫻兔の花 花淡紅色 開花三月末 方地土肥

まぐり 櫻春彼岸より 水升の方の挿花の切と水程小枝
金槌とて叩け挫ぎ大枝の鋸目と付て水器小杆へ又切と焼も可

○高麗菊

花二重色白葉黄之又黄花あり 開花三月末より四月方日向

地二分湿土をくまど 肥淡小便 下種苗代より秋彼岸の時あり

十月中小移り春株張り時先で止まば翌年三月末より四月小花咲之

剪花時己の刻より未だ刻とわきうら其外の時刻小切花無

凋と蘘回と并水の方切得て寸間焼へより水と升る

○四季咲燕子花

花の色青し 開花今夏頃より夏中旬迄咲之

又夏の土用より咲出と潮に年中花あり 方地分株等春の花と同

○八重白桃

花潔白 開花今夏頃之是桃花の殿之一種今夏頃と時よ

又逢白桃もなり

○小手毬花

麻葉繡毬 鈴懸 花白形小英擷簇て徑寸より

房分あり 開花八夏頃より四月小咲あり 方日向地中湿土甚

と 肥淡小便分株 移春秋西ひぐし 紫陽花樂仲るの

同種り小白房ありものあり

○霧島躑躅

花極上紅あり中紅あり淡紅あり 開花三月末 方

升水等二季咲躑躅と同し又紅の大霧と畧し呼ぶものあり紅色

枝群より葉の色青緑小白ら大きき堅くして光あり至て佳

青島市立図書館蔵

新撰花翁傳前篇卷之二

三頁廿二

又薩摩ゆふゆりの花中淡紅をり又平戸ゆふゆりの白花
色も淡し中品なり又雲山ゆふゆりの白花を淡紅の隈入る葉の
鳥ら白頃花のくく岩拮梗に似たり

春藤瞿麥

花淡紅藤色を含たり形ら仙翁花に似て大に櫻の花

方地土意ふ仕とく肥淡少便下種秋彼岸前ニテ葉出後春

潤少し出た淡少便十日ばかり隔く五六度澆ぶ

新撰花翁傳前篇卷之二畢

青島市立図書館蔵

